九州クラフト

KCDA

九州クラフトデザイン協会会報　2016.3

九州クラフトデザイン協会と活動

九州クラフトデザイン協会理事長　長谷川武雄

九州クラフトデザイン協会は１９６１年、塩塚豊枝、柏崎栄助、松宮寛明、那賀清彦、井上規、森正洋、岡本栄司氏らが発起人となり、柏崎栄助氏を理事長として１９６１年に設立され本年で53年目を迎えます。クラフトデザインにおいて草創期から現在に至るまで日本のクラフトの歴史と共に歩んできました。１９６２年に福岡天神岩田屋で第１回九州クラフトデザイン展開催、以降2001年に第39回展まで回を重ね、熊本県伝統工芸館での第40回展を最後に展覧会は休止しています。この間、開かれた、学べる公募展として「公開審査」を伝統とし、白熱した審査状況を出品者が直接見ることができ、この場から多くの事を学び、刺激を受けた多くのクラフトマンが日本へ世界へと羽ばたいてゆきました。その後、九州を始め東京、大阪など各地の企画展や、クラフトイベントへの参加など活動を続けてまいりました。

暖かく穏やかな中にも、時として荒々しく激しい九州の風土のように、九州各地で魅力的なモノづくりが続けられてきました。有田・波佐見の陶磁器や日田・大川の木工・別府の竹など、九州各地には素材と、技術、地域文化に根ざしたクラフト産業が数多く存在します。これまで、九州クラフトはこれらと良い関係を保ちながら発展、進化してきました。この結果、育まれてきた「九州のモノづくりの理念」を次世代に伝え、支援してゆくのが協会の使命だと考えています。

「クラフトとは？」の問いに対して「クラフトとは簡単に言うと、手仕事を中心とした技術を駆使し、素材の良さや特性を生かし、その時代の暮らしに合った美しく便利なモノをつくること」と答えます。そもそも日本における、「工芸」とも大きな意味の違いはありませんが、そこにデザインという理念が加わることにより、クラフトの意味が明確になります。そこには対象となる暮らし、つまり使い手が存在するわけで、時と共に変化する暮らしに対応しながらクラフトのスタイルは変化しますが、素材、技術、暮らしの関係性から生まれる美意識はクラフトの根幹にあり、変わらないものです。素材や技術も進化します。これらも織り込みながら進化してゆくべきでしょう。

これらの忘れてはならない九州クラフトの底流の上に、現在の、さらに、次世代のクラフトを発信し続けてゆくことがとても大切なことだと思います。

昨今、「クールジャパン」と言われ、日本の伝統文化・伝統技術が世界的に評価され、注目を浴びています。しかしながら、伝統という表層的なカタチのみのに流されてゆくことも危惧されます。日本の伝統的なモノづくりを今の時代に生かすという意味では、まさにＣＲＡＦＴと書かず、あえて日本語で「クラフト」呼ぶクラフトは、その中心的役割を担うべきで、そこに今のモノづくりの本質を見出すことが大切だと考えます。

九州クラフトデザイン協会の活動 2015 ～

■2015年2月4日　九州クラフトカタログ2015発行。ページ数も 35 ページに増え内容も充実、クラフト関係の作り手、研究機関、流通などに無償配布、協会の広報および会員の販路開拓を行いました。

2015 九州クラフトカタログ

東京インターナショナルギフトショー
東京ビッグサイト

■東京インターナショナルギフトショー
2015 春（2015 年2月 4・5・6 日）に九州クラフトデザイン協会の広報ブースを JCDA デザイナーブース内に出展。会期中 2015 九州クラフトカタログの配布と広報を行いました。

６月 29 日（日）、九州クラフトデザイン協会の総会、クラフトカフェを開催しました。総会は諫早市森山図書館で開催され昨年度の事業報告や今年度の取組みなどについて話し合われました。その後「カフェからこ野」で楽しいランチをいただき、場所を小浜町に移し、クラフトカフェを開催しました。今回は会員でもある城谷耕生さんが小浜温泉の地域活性化として取り組んでいる「刈水庵」を中心とした刈水地区の見学のあと、クラフトカフェでは、城谷さんの取り組みについてのお話をうかがいました。さらに新しい会員の紹介や、クラフトの現状、今後のことについて意見交換をおこないました。折よく良品計画の企画デザイン室の高橋さんも参加していただき、貴重な意見をいただきました。今回は会員の約半数の 20 名ほどの参加があり久々の活気のある総会となりました。

懐かしくも、スタイリッシュで落ち着いた空間が広がる、刈水庵のカフェ

刈水庵・刈水地区

刈水地区は長崎県雲仙市小浜温泉の背後に位置する住宅地域、道路が狭く再建築が出来ないため、空き家が多く高齢化が進んでいました。会員の城谷耕生さんがこれらの空き家を利用し、ギャラリーショップとカフェ「刈水庵」をオープン、ここを中心にデザインマーケットなどを開催、これを機に工芸家や料理研究家などが、刈水地区の空き家を活用し活動を始め、今では低迷していた小浜温泉の活性化の起爆剤となり、注目を集めています。

■九州クラフト企画展の開催 2015 年７月８日（水）～８月３日（月）
昨年 JR 高岡駅前の再開発に伴い、クルン高岡ビル駅前地下街にオープンしたクルン高岡 B1 ギャラリーの 1 周年企画展の一連

■東京インターナショナルギフトショー 2016 春　2016 年２月４・５・６日
九州クラフトデザイン協会の広報ブースを JCDA デザイナーブース内に出展。会期中 2015 九州クラフトカタログの配布と広報を行いました。

刈水庵、ショップを見学中の会員

刈水庵隣接の民家でのクラフトカフェ

町中から刈水地区にデザイン事務所を移したスタジオ・シロタニ

染色工房の庭からは、小浜温泉街と橘湾が見渡せる。

高岡B1ギャラリー

糸島とクラフト

ユーザーとつくり手を結ぶ顔の見えるものづくり

越　睦美（九州クラフトデザイン協会会員）

第8回 糸島クラフトフェス / 2014.9.19 - 21

足るを知る。そして、お互いが生かし合う関係。

糸島のクラフト作家の製品を欲しいと思う人なら必ずここへ足を運ぶ「糸島くらしここのき」は九州で最も大きな市場を持つ福岡市に隣接する人口１０万人弱の糸島市の駅前商店街の中にある。地方都市の商店街と聞いておそらく日本人であれば誰でもイメージできるようなご多分に洩れずの風景にある商店街の中に、足繁く福岡市から通ってくる人々がいるという不思議。糸島のつくり手が自ら出店して販売するイベントで今年で９年目を迎える「糸島クラフトフェス」通称「糸フェス」は、３日間でおよそ１万８千人の集客がある。欲しいものがあれば人はそれが地の果てでも出かけていくものだと実感せざるをえない。糸島に訪れる人は増え続け、それに比例するように２０年余りでおよそ１２０件ほど工房が存在するようになった。※１

その人気の秘密は何だろう?、人は何かを求めて糸島に訪れるのだとすればそれはいったい何だろう?、糸島とクラフトを考える時にキーパーソンである「糸島くらし × ここのき」のオーナーである野口智美さん、「糸フェス」実行委員の山本直毅さんにお話をおうかがいし、若手作家である「タビノキセキ」さんの仕事を紹介させていただくことでその秘密を考察してみようと思う。

1　広報いとしま参照　www.city.itoshima.lg.jp/uploaded/life/9883_26189_misc.pdf

野口さんは中学時代まで糸島在住。５年前に糸島に戻ってきて糸島で暮らそうと思い、ここで暮らしていくために自分には何ができるのか?ということを考えた時に、森林を間伐をする人がいなくなってきて山が荒れているというのを知り、そのことと関わっていきたいと思って始めたのが「糸島くらし × ここのき」だ。地元の木材を使って、地元の人がものをつくって、地元の人がそれを選び使ってくれることで木材の需要が増し、林業に携わる人も増え、山も荒れなくなるということ。つまり環境と人間が断絶されずにお互いに助け合って循環していくことが実現化されるための仲介役が野口さんのような人だ。

ここのきでは地元の針葉樹を製材し、それを使ってオリジナルデザインでクラフト作家が制作した商品を販売している。糸島のヒノキを使って製作された子どもが自分の手で持って使える幼児用スプーンは、野口さんのアイディアと実際に使う人の意見を取り入れてクラフト作家の技術で出来上がった商品だ。野口さんには、ゆくゆくは糸島の木工作家が定番で製作している製品にも地元材を安定供給できるようになるといいなという希望もある。

糸島市のおよそ半分近くは森林地帯である。※２木を育てる、それを使ってものづくりをする、販売する、生活の中で使われるという流れ。それはお互いが「生かし合う関係」であるということ。

2　糸島市統計参照　https://www.city.itoshima.lg.jp/site/prof/jinkou20110727.html

真面目さ。真剣さ。商品のすごさ。

ここのきは糸島に店舗を構える以外にも、「おくりもの帖」でのカタログ販売や福岡市等の都心部でも販売イベントを定期的に開催している。店舗ではご縁のある糸島のつくり手（ほぼ！糸島だそうです。）六八件の商品を販売している。ここのきは糸島のつくり手を支える販売者、売り手でもある。野口さんに糸島のクラフトの人気の理由は何だと思いと思います？と訊ねてみた。「商品のすごさかなぁ。」とユーザーにとってまた買いたい、永く愛用したいと思える商品を真面目に真剣に製作するつくり手が糸島にはいる。また、つくり手も自分たちの製品を信頼して販売し紹介してくれる売り手がいるということが「生かし合う関係」となってうまく循環しているように思える。使い捨てのものではなく、丁寧に永く使うことが自然にとっても人間にとっても必要で、それは「足を知る」ということなのだと野口さんは言う。「足るを知るってことは、あんまり商品が売れなくてもいいの？」とちょっと意地悪に質問してみたら「今の日本は消費しすぎていると思う。いいものを永く使ってほしい。」という答えが返ってきた。ここのきのお店を訪れると商品の品揃えにとても満足を覚える。間に合わせでいいかという類のものは置いてないからだ。一つ一つの商品をお客様がどんな気持ちで手に取られるかを考えてディスプレイされているような気さえする。野口さんの商品への愛情とそれをお客様へどう手渡していくかというワクワクするような試み、楽しさが伝わってくる。それが人気の秘密かもしれない。

十年後のここのきはどうなってるかな？と質問してみた。「糸島だけでなく他の地域でものづくりをしている人たちと繋がっていけたらいいな」と。糸島でしかつくられていないものを他の地域に送る、他の地域からは糸島でつくられていないものが送られてくることで横のネットワークをつくる。それによって暮らしの中でいいものを使う楽しみが広がる。

つくり手の顔が見える。ファンが増える。

「お客様が来るのを何もせず、じっと待っているより、どうやったら工房まで来てもらえるかなと考えたんです。ここの細い道の先に本当に工房があるのかな？と思ってしまい引き返してしまうお客様もいたんです。糸フェスで実際にお互いに顔を見て話したことがあると信頼関係も生まれます。工房に行ってみたいなと思ってもらえるし、細い道の前でも、大丈夫この先に必ずつくっている人がいて自分の欲しいものが手に入るかもしれないんだと思ってもらえることができるようになりました。

糸島は広く工房は点在する

糸フェス実行委員の山本さんは10年前に糸島で家具工房 CLAP を開業した。当時はオーダーメイドや手づくりの家具は一般の人が買うには敷居が高いというイメージが強く、どうやったらユーザーが工房まで来てくれるのかということを解決しなければ糸島で家具づくりを続けることが難しい状況だった。同じように糸島でクラフトで、ものづくりをする仲間と共に「糸島クラフトフェス」を立ち上げたのが2008年である。

糸島で木工、陶などクラフトをしている仲間で何をするかを考えた。福岡市という九州最大の商業都市が隣接しており、そこから自分たちのユーザーになってくれる層が確実に糸島に来ていた。糸島は海に囲まれた半島で、海岸や国宝の寺院、それ以外にもレストランやカフェ、ベーカリー、雑貨屋など見どころが多々ある。しかし、食事や観光、ショッピングで終日滞在したとしても工房は点在していて二軒、あるいは一軒しか訪れることはできない。せっかくいろいろなつくり手がいるのでまとめ見てもらえる機会を設けてはどうか。そして、そこでは日頃工房で製作している本人が自分の製品を売ることで、自分の製品のよさを直接伝えることができ、またつくり手の顔を知ってもらうことで「あ、この人の製品だったら買いたいな。」と思ってもらえることができる。「特に家具は一つ買って頂いたらそれをご縁にずっと永くお客様とのつながりができるんです。」確かに。家具は一生にそんなにたくさん買い換えるものではないと私も思う。どうしても好きになれない安価な使い捨ての家具に囲まれる暮らしは人の心を決して豊かにすることはない。修理しても永く使うことで自分の人生を共にしてくれる家具だけが自分の好きなものに囲まれて暮らすことの喜びを与えてくれる。秋岡芳夫氏も緊張感のある現代的な生活をしているからこそ自然の素材の力、木のぬくもりのある家具を使うことで疲れから癒されると著書の中で述べている。「30代、40代のライフスタイルについての意識も変わってきていると思うんです。必要でないものにはお金を使わない。消費についてとてもシビアになってきています。だからこそ、本当に欲しいもの、いいものを求めていると思うんです。」

行政に丸投げせずに自分たちでできることをやっていこうという気持ちで、つくり手たちで準備、広報、会場設営から販売まで行っている。つくり手から直接、製品を買え、糸島のつくり手が一堂に揃うということもあって一般の来客だけでなくバイヤーも訪れるようになってきた。しかし。来客が増えて嬉しい反面、車の交通整理や警備が大変になってきたので公的機関の協力を得ることも念頭に入れる。自分たちできることから初めて、多くの人が関わり育ちつつある糸フェスの人気はしばらく続きそうだ。

いつまでも変わらないでいることの大切さ

山本さんにも10年後の糸フェスはどんなんでしょうね?と質問してみた。「10年後も今とまったく変わらない糸フェスというのがいいですね。」と。「え、それって進歩がないということですか?」とちょっと意地悪に聞き返してみた。「つくり手がやっているイベントなので大掛かりになってくると自分たちが製作する時間がなくなるので。自分たちでできるということで特別なことはせずにこの先もやっていきたいですね。」あくまでも本業はものづくりである。それを真剣にやっている。糸フェスに参加希望のつくり手も増えてきた。参加資格については「販売が主ではなく、日頃はつくり手でありそれを生業としていること。どんなに時間をかけて上手くできた製品であってもそれに見合う値段が本業である人とそうでない人には差が出てしまう。そうしたら本業でやっている自分たちは食べていけない。」毎日の暮らしを支えるものづくりを生業にしているからこそユーザーに安定した製品の供給が可能である。糸フェスはその導入であり、つくり手とユーザーを結ぶ場である。糸島にはつくり手がたくさんいる。糸フェスはつくり手の顔を見て話して、製品のことを知ってもらうことでファンを増やす場でもある。ファンが増えることで仕事も永く続けることができるが、糸フェスで新作を常に出していっても年数を重ねていくと「いつも同じつくり手の製品ばかりで退屈」となる可能性も出てくるかもしれない。ゆくゆくは糸島以外のつくり手にも招待作家のようなかたちで参加してもらうことも考えていると山本さんは言う。偶然にも山本さんも野口さんと同じことを思っていた。糸島のクラフトの未来は、本当にいいものが人と人を介して横へと広がっていくものづくりのネットワークを持つものことになるのだろう。

糸フェス http://itofes.com/index.html
家具工房 CLAP　http://clap-furniture.com

ローカルでものづくりを続ける

糸島で工房を構えてものづくりをすることはとても素敵なことなんじゃないかと私は常々考えている。本当にその通りなのだろうか？公平な判断はこの記事を読んでくださる人にお任せしようと思う。そこで昨年、KCDAの会員にもなりパートナーのひろつさんとガラスと陶のアクセサリー・文具・照明器具を製作している「タビノキセキ」の長井さんの仕事を最後に紹介したい。子育てをしながら糸島でものづくりをする若いクラフト作家がいることに明るい未来を感じるからだ。彼らの後にも若いフラフト作家が育っていってくれることを願っている。福岡には芸術、デザインを専攻する学生も多くいる。将来、彼らが自分の腕でこの福岡、糸島の地でクラフトを生業とし、秀逸なものを世に出し続けてくれることを選択できるような社会を私たちは築いていけるのかということ。日本の地方都市のいずれでもいつの時代でも心豊かで美しい生活を営める基盤としてのものづくり文化を持ち続けられるという可能性を私は考えている。

アロマオイルの香りを身にまとうようにデザインされた透明感のあるアクセサリーはタビノキセキ定番の商品。洗練されたタビノキセキの製品は世代を問わず人気である。また、釉薬を使わずに登り窯で焼き締めた土器（焼締め）に純度の高い金・銀をコーティングし製作されたジュエリーやアロマライトをDOKIという別のブランドで販売している。パートナーとして協力して製作できることの良さも多くある。しかしそれぞれが自分のアイディアで得意の技術で製作するデザインを試みれること、ユーザーとの出会いによって自分の製品のどれが必要とされるのかを試行錯誤で確認しながら仕事を続けることで、お互いが成長できる良さもあるのだと私は思う。同じようにものづくりをする若いクラフト作家が糸島には多くいる。時にはジャンルを超えてつくり手同士で情報を共有したり、共に製作することのできる環境がある。「お互いが生かし合う関係」がつくり手同士を助けることもまたものづくりの質を高めている。それだけではなく、つくられたものからも楽しい雰囲気が伝わってくるのかもしれない。ワイワイガヤガヤと楽しい雰囲気のするところに人は集まってくるものである。ローカルな糸島から海風に乗って楽しい雰囲気と糸島のクラフトはどこまで広がり繋がっていけるだろうか？その広がりと共に良質なモダンクラフトが現代生活をより豊かに変えていくことを期待している。

タビノキセキ　http://tabinokiseki.shop-pro.jp
DOKI　http://doki.link

クラフトの過去と未来をつなぐ、モノ・モノ再生プロジェクト」リポート

寄稿者：菅村大全
（モノ・モノ主宰、Crafter 編集発行人）

戦後クラフトの潮流を受け継ぐために

皆さんは「クラフト」という言葉を聞いて、どんなイメージを思い浮かべるでしょうか。最近はクラフト＝手作りの雑貨と思われている方が、とくに一般の人には多い気がします。

しかし、1950〜60年代の、いわゆるミッドセンチュリーの時代の日本で「クラフト」という言葉は、現在と少し違うニュアンスを持っていました。伝統技術に裏打ちされた、海外でも通じるモダンな手仕事のデザイン。そんな進取の精神があったからこそ、先人たちは工芸や民芸といわず、あえてカタカナを使っていた——。私はそう解釈しています。

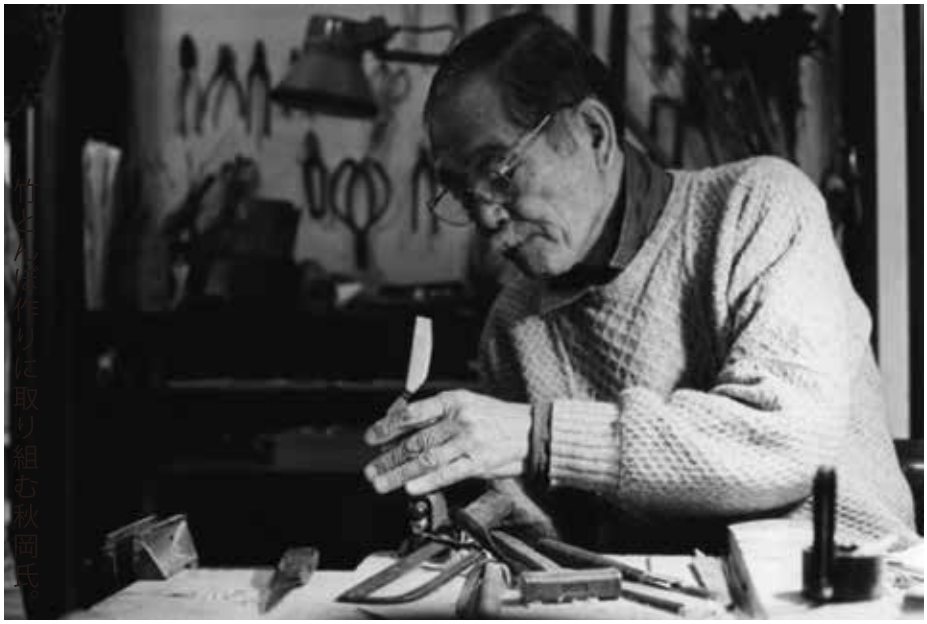
一介のフリーライターだった私が『Crafter』という作り手向けのリトルプレス（自費出版の雑誌）を昨年創刊したのも、かつてのクラフトに近い意気込みを持つ若い作り手を応援したいと思ったからです。クラフトの担い手に向け多媒体作りに続いて、もうひとつ私が注力しているのが「モノ・モノ」というコミュニティサロンの再生です。

モノ・モノは、東京・中野にあるマンションの一室にあります。創設したのは工業デザイナーの秋岡芳夫。秋岡氏を中心とするデザイン運動体「グループモノ・モノ」は、1970〜80年代にかけて日本各地でユニークな工芸デザイン運動を展開しました。

モノ・モノは、その後も生活道具店として長らく存続してきました。しかし竣工から半世紀たった建物は老朽化が進み、モノ・モノの店主も高齢化。後継者が見つからなければ閉鎖、という差し迫った状況でした。

昭和のクラフト史に名を残すスペースを残したい。そんな思いからはじめたのが「クラフトの過去と未来をつなぐ、モノ・モノ再生プロジェクト」です。

プロジェクトの経過報告をする前に、モノ・モノのこれまでの活動実績やこれからのビジョンをお伝えします。



東京・目黒のアトリエにて。
（撮影：堂六雅子、現像：池添和美）

「モノ・モノ」ってどんなグループ?

工業デザイン界のパイオニアの一人、秋岡芳夫が「グループモノ・モノ」というデザイン運動体を結成し、本格的に活動を開始したのは1971年のこと。1960年代は急激な工業化が進み、手仕事で作られていた生活用品がプラスチック、アルミなどの規格品、使い捨ての量産品に取って代わられていく時代でした。

「生活用品の画一化、使い捨てが暮らしの根底を揺るがす時代にわれわれは何をなすべきか、とことん話し合おう」と、秋岡氏が提唱。それに呼応して集まったのはデザイナー、クラフトマン、編集者、カメラマン、商社マンなど十数名。場所は東京・中野にあるマンションの一室。別名「104会議室」ともよばれたこの場所は、「組織のしがらみにとらわれず、会議方式による自由なモノ作りを目指す」ために秋岡氏が1969年にもうけました。会議室はやがて交流の場となり、毎週木曜日の夜になると、どこからともなく作り手たちが集まり、「モノ・モノサロン」と称して深夜まで活発な議論がくり広げられました。

余談ですが、104会議室開設にあたって秋岡氏が真っ先に用意したのはデスクではなく、5組の布団だったそう。「終電の時間を気にせずに、心ゆくまで語り合う場がほしかったんだ」という秋岡氏の言葉が活字として残っています。

秋岡芳夫とグループモノ・モノが残したもの

この「モノ・モノサロン」がきっかけとなり、モノ作りに関連するさまざまな先進的な試みが1970~80年代にかけて行われました。その成果は『秋岡芳夫とグループモノ・モノの10年』(玉川大学出版部)や『DOMA秋岡芳夫モノへの思想と関係のデザイン』(美術出版社)といった書籍でくわしく紹介されていますが、ここでは代表的なプロジェクトだけを紹介します。

「今日のクラフト展」1971年

「もっと暮らしの中にクラフトを」というキャッチフレーズで秋岡芳夫とグループモノ・モノが最初に企画した展示会。「消費者をやめて愛用者になろう」という秋岡氏のメッセージは、仲間たちとともに考えることにより、プロジェクトとして次々と具現化した。作り手が販売に立ち会う「展示即売会」はいまでこそめずらしくないが、グループモノ・モノが百貨店に先んじてはじめた販売手法だった。この暮らしの提案は丸善の各店にあるクラフト・センター・ジャパンの展示場を巡回し、グループモノ・モノの名前は全国的に知られるようになった。

「1100人の会」1975年

「ほれて作る、ほれられて作る、ほれて買う」、「人とモノ、人と人との原点的な関係を取り戻す」ために生まれた同好会。「会員は作り手100人、使い手1000人、顔見知りの関係を成り立たせるため1100人を限度とする」をモットーに、2013年まで38年もの間、作り手と使い手の密接な交流が続いた。具体的な活動としては、1月の新年会と6月の総会にくわえ、10月に地方の産地や工房などを見学する「創会」が毎年行われていた。初代の世話役は長野市の民藝店の元店主、横井洋一氏がつとめた。

「一人一芸の村」構想 1978年

秋岡芳夫は、モノの生産方式を「企業生産方式」「地場生産方式」「コミュニティ生産方式」に分類した。生活者が生産に参加しうるコミュニティ生産方式の復権を研究する組織が東北工業大学内に誕生した。岩手県洋野町(旧大野村)をモデルケースとして、木の学校給食器の導入など、先進的な取り組みがなされた。1990年頃からは大野産業デザインセンターが中心的役割を担い、海外との交流、クラフトの公募展の開催、クラフトマン養成塾の設置などを行い、地域の活性に多大な貢献をはたしている。

生活道具店としてのモノ・モノの変遷

このようにモノ・モノは秋岡芳夫と、氏の理念に共感するクリエイターたちのボランティア団体として活動を開始しました。プロジェクトの過程でさまざまな商品が生まれ、それらは自然な成り行きとして中野のマンションで展示・販売されるようになりました。事業規模の拡大にともない、1979年に有限会社モノ・モノが設立され、現在にいたります。

1980年代に入ると秋岡氏は日本人の暮らし方にあった家具や生活道具のデザインを手がけるようになります。なかでも座の暮らしを意識し、あぐらのかけるダイニングチェアや、カーペットスタイルの置き畳みもは後にたくさんのコピー商品が現れるほど人気を博しました。また、暮らしや生活道具に関する書籍の執筆や新聞雑誌での連載を通じて、30〜50代の生活者に情報発信を行いました。

しかし、1997年に秋岡氏が死去してからは、その存在は次第に忘れられ、モノ・モノがメディアに取り上げられる機会も少なくなりました。かつては時代の先端を行く設備を備えていたマンションも竣工から半世紀がたち、また有限会社モノ・モノの運営を担ってきた前社長や、グループモノ・モノの初期メンバーも高齢化し、歴史ある場を維持することが年々難しい状況となっていました。

ふたたび作り手が集まる場所に戻したい

2020年の東京オリンピック開催を前にレジェンド（遺産）をという言葉をよく耳にします。モノ・モノのあるマンションが竣工したのは、くしくも前回の東京オリンピックの年でした。戦後のクラフト史のレジェンドともいえるスペースを再生し、ふたたび活気のある場所にしたい――。そんな思いから有限会社モノ・モノは今夏に社長交代を行い、さらに今秋からは大規模なリノベーション工事を行い、ソフトとハード両面での若返りをめざしています。

しかしながら竣工から51年がたち、これまで一度もメンテナンスを行ってこなかった室内は、想像以上に老朽化が進んでしまいました。なかでも水道やガスの配管、電気設備はこのまま継続して使うことが難しいことが工事が進んでいく中で判明しました。インフラ設備を一新するには百万単位の費用がかかるのですが、経営難の状態が続いている現在のモノ・モノには十分な資金がありません。このままでは工事費を何とか支払うことはできても、スペースを維持することが難しい状況です。

（中略）

不足している工事費とリニューアル後の運転資金を確保するために、今回は国の第二創業（事業承継）補助金と、クラウドファンディングの両方を利用しました。結果、両方をあわせて250万円ほどの資金を得ることに成功しました。不足金額はすべて自己資金でまかない、現在は経営の早急な立て直しを図っています。

新生モノ・モノが目指す、社会的ミッション

従来のモノ・モノがはたしてきた役割はふたつあります。ひとつは「異世代・異分野の作り手が集まり、とことん意見を交わすサロン」としての機能。もうひとつは「モノ作りを通じた社会的活動の拠点」としての機能です。これらの古きよき伝統は踏襲しながら、新生モノ・モノでは以下の3つのプロジェクトに挑みます。

（1）昭和期の名作クラフトのアーカイブ、復刻、販売

インテリアや工業製品の世界では、ミッドセンチュリーとよばれる1940年代から60年代にかけて多くの名作デザインが生まれています。日本のクラフト界も同様です。とくに1960年代から70年代にかけて才能豊かなデザイナー兼クラフトマンたちが産地との深い関わりの中で、手仕事のモダンデザインを残しています。新生モノ・モノでは、昭和期の名作クラフトを展示し、モノ作りの手本としてもらうだけでなく、過去の名作を復刻し、ふたたび流通させる事業に取り組みます。

（2）秋岡芳夫の遺志を子どもたちにつたえる木育活動

秋岡氏は優秀な工業デザイナーであっただけでなく、プロ顔負けの技量をもった木工家としても知られていました。晩年はアトリエを開放し、多くの木工愛好家を育てました。東京・目黒のアトリエには「木はそる、あばれる、狂う、生きているから、だから好き」という直筆の書がいまも掲げられています。新生モノ・モノでは、秋岡氏の理念を受け継ぎ、森や木をテーマにした子ども向けのイベントを定期的に開催します。

（3）プロフェッショナルセミナーやサロンの開催

地場産業の衰退とは対照的に、2000年以降手仕事を趣味あるいは職業として目指す若者がふえています。これらの動きはハンドメイドブームともいわれ、個人間取引を中心とした新しい市場ができつつあります。工業製品の世界でも大きな変化が訪れています。3Dプリンターをはじめとするデジタルファブリケーション技術の進歩で、パソコンひとつで立体物が瞬時に造形できるようになってきました。誰もが気軽に作り手となれる時代だからこそ、クラフト界の先人たちの言葉に耳を向け、「手の内から生まれるデザイン」について学ぶ場を提供する意義があると考えています。

以上は昨年実施したクラウドファンディングサイト「きびだんご」の掲載記事を抜粋したものです。昨年4月から2か月の大規模改装工事をへて生まれ変わったモノ・モノは、11月16日にリニューアルオープンを行い、2か月がすぎようとしています。常駐スタッフは現在3人。前代表の山口泰子と私、それにモノ・モノの活動に共感し、フリーランスとして常駐してくれているウェブデザイナーの村上桂氏です。

事務所をもたず、気ままなライター稼業をしてきた私にとって都心のテナント物件を維持していくのはいささかプレッシャーですが、今後は場を持つ強みを最大限に生かして、既存のギャラリーやショップとは一線を画す、多面的な活動を行っていきたいと思います。夜間のサロン活動は継続しながら、日中も当スペースを作り手に開放すべく格安のレンタルギャラリーやレンタル会議室のサービスもはじめました。

「モノ　売り」から「モノ　語り」の場所へ。原点回帰のプロジェクトはこれからが本番です。九州のクラフトマンの皆さま、ぜひご支援をよろしくお願いします。

（プロフィール）
菅村大全（すがむらだいぜん）
◎1973年ケニア生まれ。小中高を長崎県佐世保市で過ごす。大学卒業後、カタログ通販会社を経て独立。フリーライターとしてライフスタイル誌を中心に活動する。2014年に作り手向けのリトルプレス『Crafter』を創刊。2015年に有限会社モノ・モノの4代目代表に就任。クラフトセンタージャパン元評議員。

改装工事後のモノ・モノ。約 100 平米のマンションの壁をすべて取り壊し、交流スペースを確保した。

〒164-0001　東京都中野区中野 2-12-5　メゾンリラ 104
JR・地下鉄東西線中野駅南口から徒歩 3 分
電話　03-3384-2652
営業時間　木曜日〜日曜日　11：00〜18：00

KCDA　九州クラフトデザイン展

2016 年 6 月 9 日〜 26 日
6/9-12、16-19、23-26（木・金・土・日曜日の営業です）
会場　モノ・モノ
内容　九州のクラフトの展示・即売（九州クラフトデザイン協会会員、一部会員以外）
特別展示　「九州の名作クラフト展」　モノ・モノと長谷川武雄が選んだ九州発のロングライフデザイン
会期中開催イベント（以下現在調整中、詳細は 5 月初旬に決定します）
・トークイベント
・オープニングイベント　「九州の器で九州の食材を味わう会」
・モノ・モノサロン　「関東在住・九州出身クリエイターの会」

教会活動を通しての事例

協会員、西茂氏の「木の葉の箸置き」デザイン提供に関する契約事例

九州クラフトデザイン協会事務局小野寺幸裕

先方からの提案条件

2015年7月に富山県高岡市のクルン高岡B1ギャラリーから九州クラフトデザイン協会に企画展依頼があり、協会員数名での出品しました。出品者の一人、福岡地区の西茂氏のもとに高岡市内で鋳造製品を製造販売している竹中銅器より、「今回、クルン高岡B1ギャラリーに展示販売されている木の葉の箸置きを当社にて金属で製造販売したく、デザインの使用と製造販売の許可に関する契約をして頂きたい。」とのこと。

①西茂氏の「木の葉の箸置き」のデザインを使用して真鍮と錫で竹中銅器が製作・販売の許可
②西氏と竹中銅器以外に類似品が出た場合の共同での対処
③デザイン提供と製作販売に対する対価の条件提示
④お互いの契約条件を協議した後の正式な契約

この様な提案内容を受けて個人作家として活動してきた西氏としては初めての事であり連絡を頂いた竹中銅器と言う会社の事もわからない状況だったので、理事長（長谷川氏）に相談をし、情報収集とこの様な場合の契約条件（デザイン料、ロイヤリティー等）の事例などを教えて頂きました。また、同協会員の車氏にも相談。多くのデザイン提供とモノづくりの環境を知っている車氏からもご教授頂き、此方の条件提示をしました。

10月中旬に来福頂き本契約を結ぶに至りました。類似品問題やデザインの無断使用などが多く取りだたされる昨今で、この様に遠く離れた個人作家に丁寧な連絡と契約条件の提示をして頂いたのも協会と言う団体に所属して、その団体に経験と知識豊富な方々に相談できる環境にあったことだと思います。

実用新案、自分で出願・登録

九州クラフトデザイン協会　長谷川武雄

クラフトマン、デザイナーにとって、著作権は重要な問題です。特に意匠登録や商標登録は業務上、避けては通れない状況も少なからず現れると思います。しかしながら、これらの出願の費用は零細の事業者にとって、負担が大きく、出願、登録をしないで済ませるケースがほとんどです。そのような状況を踏まえ、実用新案の出願に挑戦してみました。

現在では、実用新案は出願の97％が電子出願です。出願にあたっては、特許庁のホームページから出願方法、類似案件はプラットフォームでのキーワード検索などで知ることが出来ます。出願用紙をダウンロードし、記載例を参照しながら出願書の作成を行い、分からないところは電子出願サポートセンターに電話すると懇切丁寧に教えてくれます。費用は申請料、登録料（三年分）で約21，000円でした。出願後、一度修正命令が来ましたが、約三か月で登録されました。意匠登録や商標登録同様かと思います。この様な経験を生かして、会員の皆さんのサポートも行ってゆきたいと考えています。（これは弁理士の役割を否定するものではありません）

実用新案登録した、マグカップ型スマートフォン用スピーカー 「スマホカップ」

九州クラフトデザイン協会は
会員・賛助会員を募集しています。

私たちと共に、九州のクラフトの伝統と創造に取り組む皆さんを募集しています。九州のモノづくりの底流に流れる九州のクラフトの本質を守りながら、次世代の九州のクラフトを創造するための様々な取り組み、情報交換、発信を行います。仲間の構成は、協会の理念に共感する人で、九州のクラフトデザインに関わる人、関心のある人、これを応援する人など柔軟で多様性に富んだ構成を目指しています。

活動目的　九州クラフトデザイン協会　定款より
本会は、クラフトデザインに関係する人々の団体で、会員相互の協力によりクラフト産業の基盤の確立を図り、九州のクラフトデザインの発展に寄与することを目的とする。

会員資格　九州のクラフトデザインに関わりを持つ人であれば、作り手、使い手、応援者、居住地域を問いません。　※理事会による承認が必要です。

活動内容　1 ページの協会の方針を参照ください。

●現在会員数 40 名（正会員 37 名　賛助会員 3 名）

●会費　会員・賛助会員ともに、年間 10,000 円

●入会ご希望の方は下記の入会申込書送付依頼書に必要事項を記入し、メール、ＦＡＸ、郵送でご依頼ください。

入会申込書送付依頼書	
名前	関係ジャンル
郵便番号　住所	
ＴＥＬ メール	ＦＡＸ

九州クラフトデザイン協会会報　九州クラフト 2016　　2016 年 3 月 31 日発行
発行責任者、編集　九州クラフトデザイン協会理事長　長谷川武雄

九州クラフトデザイン協会
事務局　819-1151　福岡県糸島市本 913　芸術村　工房雲内
TEL/FAX　092-323-5606　　e-mail　info@kcda.jp
HP　http://www.kcda.jp/

九州クラフトデザイン協会

KCDA

九州クラフトデザイン協会